

すくすく たけのこ



“認める”こと・“褒める”こと

あじさいの花の紫が、日ごとに深まっていく季節となってきました。子どもたちは、梅雨の晴れ間に、元気に体を動かしたり、自然に触れあったりして毎日楽しそうです。

1学期も気が付けば、あと1か月。そこにはもう本格的な夏の足音が聞こえています。



「先生、どうしたら子どもが伸びますか？」と

いう質問をよく受けます。とても一言で答えられるようなものではない、難しい質問ですが、どうしても“一言で”と言われたら、**「私は“認める”ということを心掛けています」**と答えています。



「えっ、褒めることじゃないんですか？」と親御さんから聞き返されることもあります。もちろん、褒めることは大事です。ただ、私は子どもの力を伸ばすには、**“認める”**といった方がしっくりくるのです。

確かに、子どもの力を伸ばすには、「褒めることだ」と言われます。しかし、**「褒めること」と「認める」**ことは、**“似て非なる言葉”**だと思ふのです。

褒めたり、認めたりする私たち親(大人)の側から見れば、この両者の違いは、ほとんど無いように感じますが、当人である**子どもにとっては、大きな違いを感じる場合もあります。**



保護者の方からの「認めてあげようと思って褒めているんですよ」「褒めることがそのまま認めることになるんじゃないですか」との声も聞かれます。また、多くの子どもたちもそんな感じで受け止めています。しかし、中には褒められてもそれほど嬉しそうな顔をしない子ども



います。

「そもそも親(大人)が、子どもを褒める時は、どんな時でしょうか？」

それは、**「大人の“基準”や“水準”で褒めていることが多い」**と思います。

「褒める」という言葉を子どもたちの辞典で調べてみると、**『すくれている』『りっぱである』**と評価して、**そのように言う。たたえる**と記されています。



元来「褒める」という行為は、**相手の行為がその基準や水準に達したときに評価する行為**です。そこで、忘れてはならないのは、**褒めるという行為のもとにある基準や水準というものが、こちら側、つまり親(大人)にあるという点**です。したがって、ともすると**“上から目線”になりやすい**という傾向をもっています。

だから、子どもの行動が、親(大人)の求める基準や水準に届かない場合は、「もっと頑張りなさい!」「もっと努力しなさい!」といった叱咤激励の言

葉を子どもに何度も繰り返して言ったりして、褒めることが希(まれ)になってしまうことがよく見られます。

それに対して、子どもが「認めてもらいたい」という時は、**子どもの側の基準や水準で「褒められたい」と思っています。**



つまり、その子なりの**“こだわり”や“努力”で工夫したり、努力したりしたことを認められたい**のです。

だから、たとえ親(大人)の考える到達点に達していなくても「褒めてほしい」と考えるのです。到達して褒められた場合でも、喜んだりしないのは、こうした点が関係していると考えられます。

自分がたいした努力をしていないのに、また自



分の功績ではないことを「頑張ったね!」とか「すごいね!」と言われても、それほど喜びもないし、励みにもならないのです。

子どもは、過度に褒めちぎられたり、おだてられたりしていることと、本当に**自分のことをよく見て、褒めてもらっていることの違いを敏感に感じ取っています。**

◆ ◆
創業者は、『新・人間革命』「若芽の章」で、このような言葉を綴られています。

「児童を結果のみで評価しようとするれば、その評価の基準は、極めて限られ、画一化されたものになってしまう。しかし、プロセスを評価しようという目をもつならば、より多くの可能性を見出すことができよう」

「子どもの力を伸ばす」とは、「子どもの力を引き出すことである」と言い替えることができます。そのためは、子どもの姿や行動の中に**読み取れる心をよく見ていくことが大切です。**

そして、物事に取り組みさせる際には、子どもの実際の**行動や心と向き合って**、表面的に表れた結果だけでなく、**その子なりの“こだわり”や“努力”で工夫したり、がんばったりしたことを見てあげてほしい**と思います。



◆ ◆
「認める」ことは、「相手に重きを置くこと」に、そのポイントがあります。だから、相手を「**理解しよう**」「**わかろう**」という気持ちが大切なのです。「褒める」ことも「叱る」ことも、私たち親(大人)が、そうした気持ちになることで、はじめて成り立つものではないでしょうか。

「“教育”は、“共育”であり“共行”である」と言われます。親子で**感動を共有するから“共育”**です。**一方通行でなく、双方向で共に進んで行くから“共行”**なのです。

愛情期・しつけ期・自立期の3期に分かれると言われる教育。「愛情期」は、**小学校に上がるまで**と言われます。「認める」ことは、**最も素直な愛情のあらわれである**と思います。

うっとうしく思う梅雨も、作物にとっては大きく伸び行くための慈雨(恵みの雨)です。そんな気持ちで、雨粒を見ていると、キラキラと輝いて見えてきました。(晃)

